



酒井抱一《朝陽に四季草花図》文政4-11年(1821-28)

Topics

帰ってきた江戸絵画 ニューオーリンズ ギッター・コレクション展  
新収蔵作品展

武蔵野美術大学 美術館・図書館所蔵 ネフ・コレクションーヨーロッパの木製おもちゃ

## 日本の絵画作品を救ってくれた恩人

日本近世から近代の美術史、とくに江戸時代の絵画史を専門とする私は、古代や中世を専攻する美術史家と違って、これまで長い間せわしない学究生活を送ってきました。作品を追いかけて、国内はもとよりのこと、海外にもたびたび調査に出かけたものでした。アメリカ、ヨーロッパの諸国、そしてオーストラリアや韓国などにまで足をのばし、在外日本美術品の発見や見直しに精を出したものでした。その間に、美術館や博物館の学芸員ばかりでなく、日本美術を愛する個人コレクターの方々と親密な友情を育てることもできました。今回監修をさせていただいた「帰ってきた江戸絵画 ニューオーリンズ ギッター・コレクション展」の、カート・ギッターさんもその一人です。

ギッターさんは、アメリカを代表する眼科医として、国際的にその名を知られた名医ですが、若き日にアメリカ空軍の医官として九州に2年間滞在する機会を得、日本の文化と美術に魅せられたのでした。はじめは白隠などの禅僧の書画に心を惹かれ、やがて文人画、そして琳派や浮世絵などへと、興味の対象を広げていきました。今では、江戸時代に展開した幅広い絵画領域のほぼ全域に、収集のターゲットを広げています。

ギッターさんの父君は、第2次世界大戦の折にユダヤ人として迫害を受け、アメリカに移住して家族を守った方でした。ニューヨークでは酒屋を営んだこともあると聞いていますので、おそらくは生活も楽ではなかったことでしょう。そうした家庭事情のもとに苦学して医者となったギッターさんは、医者として得る報酬の内から工面して美術品を購入してきたのであって、大富豪の家の遺産によるというような恵まれた条件で収集してきたわけではありませんでした。1点1点をよく吟味して、自分のお眼鏡に適うものだけに身銭を切って手元に引き寄せ、自宅で愛玩してきたのでした。

米国の南部、ニューオーリンズの、瀟灑な住宅街にあるギッター邸には、家族のお住まいである母屋と、ギャラリーとして、またゲストハウスとして使う別棟とがあり、庭には高い木々と芝生とが豊

かな緑を広げています。その母屋の方には、壁の至るところに日本の掛軸がかけられ、余裕のある空間には大作の屏風画が広げられています。自宅の全体を日常的に江戸絵画館のようにして、奥様と令嬢と3人で仲むつまじく暮らしているのです。一方の別棟では、1階に日本美術品、2階にはアメリカのナイーブ・アート(素朴美術)を展示して、訪れる美術好きのゲストを楽しませています。お気に入りの美術品を時に応じて並べ替え、楽しむという、羨ましいような美的生活を実現しているのです。

ところで、今から5年前、2005年の8月末に、ニューオーリンズをはじめとする米国東南部の広い範囲に、超大型のハリケーン、カトリーナが襲来しました。深刻な状況になることを予報で知らされたギッター一家は、ニューヨークの別宅に避難して無事でしたが、愛する美術品を遠方の地に移動するだけの余裕はありませんでした。別棟に設けられた美術品収納場所の、できるだけ高い位置に置き換えるなど最低限の手当をするのが精一杯だったそうです。お蔭で浸水の水位もあと僅かのところで引いてくれたとのことですが、ハリケーンが去った後も長いあいだ停電が続き、空調も止まったままであったために、高温と多湿に脆弱な日本絵画作品は一時深刻な状態に陥ったのでした。その被害を回復するため、懇意の修復家をニューヨークのメトロポリタン美術館から派遣してもらい、ようやく難を避けることができたのでした。

日本の貴重な絵画作品を、個人の力で必死に守り救ってくれたギッターさんに、私の感謝の気持ちは言葉で言い表せないほどです。今回の展覧会を期に、異国の人でありながらこれほど真実に日本の美術を愛してくれる人が存在するということ、多くの人に理解していただければ、長年の心の友として、嬉しく、有りがたく思われます。そして、とかく忘れがちな自国の文化伝統に改めて深く、思いを致していただければ幸いです。

[館長 小林 忠]



ギャラリー兼ゲストハウス



ギッター邸母屋

開館15周年記念

帰ってきた

江戸絵画

ニューオーリンズ  
ギッター・コレクション展

Returning Home:

Edo Paintings from

the Gitter-Yelen Collection

## ギッター・コレクションの魅力

カート・ギッターさんのニューオーリンズのご自宅には2回うかがったことがあります。1回目は展覧会も視野に入れた調査・研究のため、そして2回目は、開館記念展の「祝福された四季―近世日本絵画の諸相」(1996年)でお借りした酒井抱一の《朝陽に四季草花図》(表紙の図)をご返却にあがった時です。奥様のアリス・イエレンさんも共に気さくな人柄で、それぞれ想い出深い滞在となりました。特に2回目の時は、大切なご友人を亡くされたばかりの時に、間の悪さに申し訳ない気持ちで一杯だったのですが、温かく迎えていただきました。当時はまだ小さなお子様であった可愛い娘さんも今は大学生でスピーチにも長けていらっしゃるとのこと、私の拙い英語とちょうど良かったのに、月日の経つのは早いものです。

今回お会いするのはその時以来なのですが、毎年のお正月にはご家族の近況を伝えるお手紙を下さり、2000年には日本でも禅画の展覧会をされていましたので、この間にも存在が遠くなってしまったような気はしていませんでした。

最も心配したのは2005年にニューオーリンズを襲ったハリケーン、カトリーナの時です。ご家族はどうされたであろうか、そしてそのコレクションはどうなったであろうか、江戸美術の研究者の間では皆が心配していましたが、やがて無事とのニュースが入った時は、とても安堵しました。それでも日本の作品数点と、またアリスさんが収集されていたアフリカ系アメリカ人作家によるナイーブアートの多くが失われてしまったこととお聞きしたのは、つい最近のことです。奥様はその専門家でもあり、ニューオーリンズ美術館の副館長をつとめ、本も出版されていた位ですから、ご心情を思うと切ない気がします。

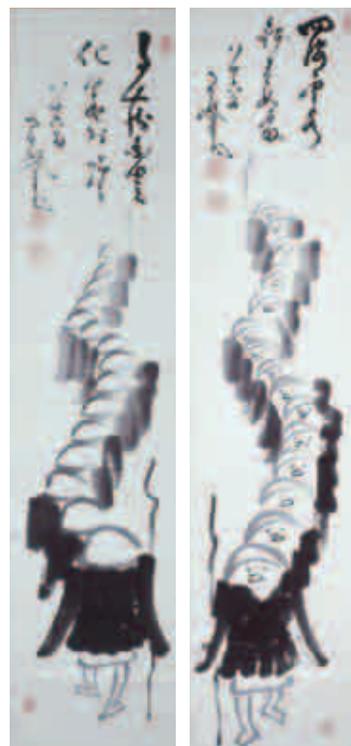
あの状況の中で奇跡的に助かったのが、今回公開される江戸絵画のコレクションです。展覧会は、6つのテーマに分けて展示しますので、これに沿って紹介していきたいと思います。

まずsection 1「若冲と奇想の画家たち」では、本年度千葉市美術館で開催した「伊藤若冲―アナザーワールド」展でもおなじみになりました伊藤若冲(1716-1800)の作品が中心に展示されます。若冲の価値をいち早く見出してその名を高めたのは、やはりアメリカのコレクター、ジョー・プライス氏であったことはよく知られていますが、その斬新で澁刺とした水墨の表現にギッターさんも惹かれたようです。ポスターやちらしにも使いました《達磨図》や、墨の中に浮き上がる正面向きの象を描いた《白象図》は、特に印象的な作品です。

Section 2「琳派の多彩」では、琳派絵画を中心にご覧いただけます。江戸時代初期に京都で活躍した俵屋宗達(生没年不詳)にはじまる琳派は、装飾的でデザイン的な日本絵画の特徴を華やかに展開しました。それは江戸の酒井抱一(1761-1829)に受け継がれ、その一派は江戸琳派とも呼ばれています。抱一とその弟子の鈴木其一(1796-1858)を筆頭に多くの作品を残した江戸琳派は、画風を一層洗練させて明快な表現としましたが、アメリカ人コレクター達に大変人気のある分野です。先の抱一の《朝陽に四季草花図》も再び里帰りです。



伊藤若冲《白象図》寛政7年(1795)



中原南天棒《托鉢僧行列図》大正13年(1924)

ちなみに来年度千葉市美術館では、酒井抱一と江戸琳派を取り上げて展覧会を開催する企画がありますので、こちらもご期待ください。

ギッターさんがはじめに親しんだのは禅画だといいます。次のsection 3「白隠と禅の書画」のコーナーでは、白隠(1685-1769)を中心に、禅の書画を展示します。実は美術史という学問の中で禅の書画が扱われることはあまりありませんし、一般的には日本での企画展も少ないのです。しかしギッターさんは美術と禅の書画を分け隔てることなく、また文字情報や既成の評価にとらわれずに魅力的に感じられた作品をコレクションとされてきました。禅僧が手がけた禅の真理をわかりやすく伝えるための作品であるので、プロの画家や書家のような技術があるわけではなく、上手いと言える作品でもありません。しかしそれだけに天衣無縫で奔放な、思いがけない水墨の面白さが発見できることでしょう。中原南天棒(1839-1925)が描い

た《托鉢僧行列図》などは、江戸時代の作品ではありませんが、ただ托鉢に行っては帰るだけの僧達を揶揄するユーモラスな絵で印象的です。

四季のある日本では、自然に対する感覚が鋭敏であり、絵画の題材として植物や動物が積極的に取り上げられて来ました。Section 4「自然との親しみ」では、植物や動物を題材とした作品を取り上げています。山本梅逸(1783-1856)の《四季草花図》は、確かな自然観察力と描写の素晴らしさが冴える名品です。

文人画を中心に展示するのがsection 5「理想の山水」のコーナーです。「文人」とは、政治や金、出世といったことにとらわれがちな俗世を離れて、書画や学問を自らの楽しみとしながら暮らす隠士をイメージした言葉です。山水画はこの分野の画家が得意とした高潔で格調高い絵画主題ですが、同じ山水でも画家によって表情が豊かに変わるその様相をご覧ください。ここに展示される与謝蕪村(1716-84)の《春景山水図》や谷文晁(1763-1841)の大作《山水図》は、ギッターさんの自慢の作品です。

人事風俗を題材としたのが最後のsection 6「楽しいな人生」です。このコーナーでは、風俗画や浮世絵が中心に展示されます。江戸時代は世界的に見ても稀なほど長く太平の世が続いた時代です。裕福な階層ばかりでなく、庶民に至るまで人生を楽しみ、絵を楽しむゆとりがあったように思います。歌川国貞(1786-1865)の《美人見立土農工商図》は、土農工商それぞれの美人を描き出したという作品で、江戸時代らしい趣向の美人画と言えるでしょう。

このようにギッター・コレクション展は、バラエティ豊かな江戸時代の絵画を見ることのできる展覧会です。オーソライズされた名品主義で選ばれた作品ではなく、一貫してギッターさんの眼が選んできたのだという所に、このコレクションの面白さがあるように思います。江戸絵画の未知なる魅力を発見しながら、展示室を巡っていただければ幸いです。

[学芸課長代理 田辺昌子]



歌川国貞《美人見立土農工商図》天保(1830-44)後期



山本梅逸《四季草花図》(右隻) 19世紀前半



与謝蕪村《春景山水図》安永6-天明3年(1777-83)

#### 関連企画

##### ■ 記念講演会(往復葉書による申込制)

「琳派の魅力ーギッター・コレクションを中心に」

1月16日(日) 14:00より(13:30開場) 11階講堂にて

講師: 河野元昭(秋田県立近代美術館館長)

定員: 150名 聴講無料 \*申込締切1月7日(金)[必着]

【申込方法】往復葉書に郵便番号、住所、電話番号、氏名、「1月16日記念講演会」と明記の上、下記までお送りください。応募多数の場合は抽選となります。(一通につき2名様までお申込可。)

〒260-8733 千葉市中央区中央3-10-8 千葉市美術館 企画係

##### ■ 新春特別イベント

「太神楽ー江戸の正月」

新年を寿ぎ、伝統の曲芸をお楽しみください。

1月4日(火) 13:00と15:00の2回公演 1階さや堂ホールにて

出演: やなぎ南玉(江戸曲独楽)

鏡味初音(太神楽曲芸)

協力: 太神楽曲芸協会 \*入場自由



#### 開館15周年記念

帰ってきた江戸絵画 ニューオーリンズ ギッター・コレクション展

2010年12月14日(火)▷2011年1月23日(日)

10:00—18:00(毎週金・土曜日は20:00まで)

\*入場受付は閉館の30分前まで

[休館日] 年末年始のみ(12月29日~1月3日)

[観覧料] 一般 1,000(800)円, 大学・高校生 700(560)円

\*小・中学生および障害者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料

\* ( )内は前売、団体30名様以上、および市内在住60歳以上の料金

\*前売券は、ローソンチケット(Lコード: 32978)、千葉都市モノレール「千葉みなと駅」「千葉駅」「都賀駅」「千城台駅」の窓口(1月23日まで)にて販売。



三岸節子《高原の花》昭和38(1963)年 楠原豊松氏寄贈

## 新収蔵作品展

美術館にとって、所蔵作品を知り、守ることはとても大切な仕事です。それぞれが持つ物語を広げ、コレクション全体を豊かにするために、新たな作品を収集することもまた同じ。このところの財政状況により作品購入はしばらく行っておりませんが、寄贈・寄託という形で所蔵品は着実に増えています。貴重な作品を寄せてくださる方々に感謝しつつ、当館の活動がいささかなりとも評価されているのでは?と少々自負もしている昨今です。今回の新収蔵作品展では、平成17年度以降に寄贈・寄託いただいた作品から、初公開作品を中心にご覧いただけます。時代は江戸時代初期から現代まで、ジャンルは日本画、油彩画、書、版画、漆器、立体造形など多岐に渡りますが、見所のいくつかをご紹介します。

まずは、当館では比較的手薄な分野である近・現代の油絵から、三岸節子(1905-99)の《高原の花》。三岸節子は花を愛し、その長い画業を通じて花に取材した人ですが、1950年代から花を、静物画の一要素としてではなく画面をはみだすほどにクローズアップして描くようになります。本作もそうした一点。絵具の厚く盛られた起伏のある画肌が、納得するまで塗っては削り、削っては塗ったという画家の姿をありありと伝える作品です。三岸は「花よりもいっそう花らしい」、「私じしんのみた、感じた、表現した、私の分身の花」を描きたいと語っていますが、なるほどこの花も、もはや品種すら定かではなく、三岸節子その人のように強靱で熱情的な風貌をしています。



高田柳哉《平棗 大徳寺椿》平成12(2000)年 高田柳哉氏寄贈

続いては、やはり収集があまり進んでいない工芸のジャンルより、高田柳哉(1926年生)による《平棗 大徳寺椿》。両手にすっぽり収まってしまうほどの小さな器ながら、可憐な椿の彼方に広がる空間を感じさせる作品です。高田は東京麻布に生まれ、実父である初代高

田柳哉に師事して漆芸の道に入りました。戦後は千葉市に移り住み、蒔絵や螺鈿、象嵌など多彩な技法を駆使した格調高い漆器の作り手として知られます。今回は作家ご本人からご寄贈いただいた10点を展示。伝統を誠実にふまえ、現代的な美感をもそなえた一群が、展示室に優美なアクセントを点じてくれることでしょう。

そして最後に、時節柄おめでたい作品を一点。勝野范古による《寿老人図》です。勝野范古は長崎の絵師。師系も生没年も詳らかではありませんが、本図は年記のある貴重な作例です。寿老人とは道教の神様で、天下泰平と長寿を司るといふ南極老人星の化身。やはり長寿のシンボルである鹿とともに描かれますが、トレードマークの長い頭に見覚えのあるかたも多いはず。そう、日本では七福神のおひとりとして知られます。作品を前に、新しい年の平和と健康とを祈ってみてはいかがでしょうか。



勝野范古《寿老人図》明和2(1765)年 個人蔵(寄託作品)

展示室でよく、「美術って難解」とか「美術の見方がわからない」という声を耳にするのですが、何でもいい、好きな一点を見つけることがアートに親しむ第一歩だと思います。今回の展示は必ずしも著名作家の大作ばかりではありませんが、コレクターに愛蔵され、あるいはご遺族の手で大切に守られてきた作品たちは、「心が動く」という、創造と鑑賞の基本を教えてくれる気がします。また美術館としても、作品そのものだけでなく、それらを守ってきた人たちの心をも伝えてゆきたいと思うのです。貴重な作品をご寄贈・ご寄託くださった方々への感謝の意を改めて示すとともに、ご来館くださるお客様にも、作品を身近に置き、愛でる気持を共有していただけたらと願ってやみません。

[学芸員 西山純子]

### 新収蔵作品展

2011年1月29日(土)▷2月27日(日)

10:00—18:00(毎週金・土曜日は20:00まで)

\*入場受付は閉館の30分前まで

[休館日] 2月7日(月)

[観覧料] 一般200(160)円、大学・高校生150(120)円

\*小・中学生および障害者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料

\* ( )内は前売、団体30名様以上、および市内在住60歳以上の料金

\*同時開催「ネフ・コレクション—ヨーロッパの木製おもちゃ」入場者は無料

## 武蔵野美術大学 美術館・図書館所蔵

### ネフ・コレクション —ヨーロッパの木製おもちゃ

東京都小平市のキャンパス内にある武蔵野美術大学 美術館・図書館(旧 武蔵野美術大学美術資料図書館)は、2010年4月より名称をあらため、この6月に新棟が全面開館となりました。気鋭の建築家藤本壮介による大胆なデザインは、図書館建築の一つの姿を提案するものとして注目を集めています\*。同館の主要なコレクション分野の一つに、19世紀以降のモダンチェアなどのプロダクト製品や、20世紀アヴァンギャルドのポスター、書籍資料等を基礎とする近代デザイン全般に関する資料が挙げられます。今回紹介する玩具は、25,000点にもおよぶポスターや椅子のコレクションとあわせて、同館の誇るデザインに関する収集資料の中でも、たいへん充実したものといえるでしょう。このコレクションの核となっているのは、同館の2回の企画展「遊びのかたち—組木・おもちゃ・凧絵—展」(1971年)、「木のおもちゃ展」(1983年)を機に収集を進めてきたスイス、デンマーク、フィンランド、そして現代日本の木製玩具であり、今回の特集展示では、その中からネフ社関連の資料を紹介します。

スイスの家具職人だったクルト・ネフ(1926-2006)は、1954年、北欧からの輸入や自らのデザインによる家具や食器を販売する会社を設立します。その後まもなく、1958年の玩具《ネフスピール》【図1】の発表を機に、ネフ社は本格的な玩具制作に取り組み始めます。自らがデザインしたカラフルな色彩の積み木《ネフスピール》は、現在でも世界中で愛されています。1958年の初期モデルは、脚の角度が浅く先端が尖っているのが特徴といわれています。1970年頃からとみられる現行モデルは角度が深く、縦方向に積み上げやすいよう先端が平らになっているとのこと。素材はやわらかくあたたかみのあるカエデが使われています。また、ネフ社は、日本人を含む国内外のデザイナーとのコラボレーションや、バウハウスでデザインされた玩具の復刻も行っています。ネフが工場併設の自社ビルを建てた1960年代後半に出会ったペア・クラークセンとの仕事は、同社に多くの名作をもたらしました【図2】。

ネフ社の玩具にとっては色彩もきわめて重要であり、厳しい品質管理の下、同じ色を何回も塗り重ねることで実現されます\*\*。シンプルでありながら、複雑な遊びにもつながってゆくかたちのおもしろさとともに、明快な色彩とその組み合わせが生む楽しげなリズムは、子どもたちばかりでなく大人をも夢中にさせるネフ社の玩具の大きな魅力といえるでしょう。

[学芸員 山根佳奈]

\*参考：寺山祐策 監修『別冊KALEO DOCUMENT MAU M&L / L 武蔵野美術大学 美術館・図書館 新棟落成記念』、武蔵野美術大学 美術館・図書館、2010年  
\*\*「遊びのなかの色と形展」図録、目黒区美術館、2010年、pp.21-23



【図1】  
クルト・ネフ《ネフスピール》1958年



【図2】  
ペア・クラークセン《アンケーラ》1970年

## 武蔵野美術大学 美術館・図書館所蔵

### ネフ・コレクション —ヨーロッパの木製おもちゃ

2011年1月29日(土)▷2月27日(日)

10:00—18:00 (毎週金・土曜日は20:00まで)

\*入場受付は閉館の30分前まで

【休館日】 2月7日(月)

【観覧料】 一般 200(160)円、大学・高校生 150(120)円

\*小・中学生および障害者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料

\* ( )内は前売、団体30名様以上、および市内在住60歳以上の料金

\*同時開催「新収蔵作品展」入場者は無料

## ◎「ブラティスラヴァ世界絵本原画展とチェコの人形劇」展イベント報告

12月5日まで開催された「ブラティスラヴァ世界絵本原画展とチェコの人形劇」では様々なイベントを行い、たくさんのお客様に参加していただきました。その様子をご報告いたします。

まず、4日間にわたり延べ8回行われた、人形劇団ブークの荒川純子さんによる糸操り人形のデモンストレーション。様々な種類の操り人形が、荒川さんの手にかかるとまるで生きているかのように動き出します。お客様の飛び入り参加もあり、人形を操ることの楽しさ、難しさが伝わりました。

人形が動く、となればストーリーを追って楽しみたいもの。人形劇団MあんどBさんに上演していただいたのは、アンデルセン原作の「えんどう豆の上にねたお姫さま」。公演は期間中に4回の予定でしたが、あまりの人気に急遽回数を増やしていただくことに。可愛いお話にあわせて動く人形に子供たちも目が釘付けでした。

人形劇だけでなく、絵本原画展の関連イベントも行いました。出品作家でもあるイラストレーター・山口マオさんのワークショップです。こちらは自分を動物にたとえたキャラクターを木版画にするという内容で、参加者が用意したキャラクターはどれも個性的なものばかり。なかには版画にするのは難しそうなものもありましたが、山口さんの丁寧な指導もあって仕上げることができました。

講演会ではブラティスラヴァ世界絵本原画展2009年展の国際審査員である柴田勢津子さんをお招きしました。90分があつという間の凝縮されたお話で、チェコ共和国の人形や文化へより興味を持たれた方も多くいらっしゃるのではないのでしょうか。

今後も各展覧会で様々なイベントを企画していきますので、ご注目ください。



糸操り人形のデモンストレーション  
10月17日、30日、11月14日、27日



講演会 11月21日



人形劇の上演  
10月10日、11月21日



出品作家によるワークショップ 11月6日

### 第3期美術館ボランティアスタッフ養成研修報告



合同研修会の様子

## ボランティア日和 —番外編—

平成22年度より活動を始める美術館ボランティアスタッフ3期生の研修を行いました。千葉市生涯学習センターでの基礎研修(6~7月)受講後、美術館での専門研修(9~10月)を終え、いよいよ現場での実習が始まります。今回の研修終了生は5名で、内訳はギャラリートーカー 2名、鑑賞リーダー 3名となります。

基礎研修では、生涯学習施設でのボランティア活動について、生涯学習センター、加曽利貝塚博物館、郷土博物館からの研修生とともに学びました。専門研修では、美術館の活動内容やコレクションの概要、展覧会ができるまでの簡単な流れなど、ギャラリートークや鑑賞リーダー活動に必要な事柄を学んだあと、模擬ギャラリートークに挑戦。各自が選んだ作品の画像をスクリーンに映し、研修生仲間を聴き手として、持ち時間10分を使ってトークを試みました。研修最終日は、ゲスト講師として国立西洋美術館教育普及室の寺島洋子さんをお迎えし、お話をうかがいました。現メンバーとの合同研修でもあり、顔合わせも兼ねた回となりました。

5名を加えて、来年度ますますパワーアップする美術館ボランティアスタッフの活動に、どうぞご期待ください。

## ◎市民美術講座のお知らせ

「市民美術講座」は、市民のみなさまに千葉市美術館のコレクションを紹介し、作品についての理解を深めていただくものとして、2004年度より実施しております。

今年度下期は右記の内容で行います。聴講は無料ですのでお気軽にご参加下さい。

[時間] 14:00より(開場は30分前)  
[場所] 11階講堂  
[定員] 先着150名(入場無料)

- 第8回 12月18日(土) 「神坂雪佳と19世紀末の図案家たち」  
[講師] 西山純子(当館学芸員)
- 第9回 1月15日(土) 「鳥居清長と錦絵の黄金時代」  
[講師] 田辺昌子(当館学芸課長代理)
- 第10回 2月19日(土) 「喜多川歌麿と錦絵の黄金時代」  
[講師] 田辺昌子(当館学芸課長代理)

## ◎WiCAN2010 アートからはじめる学校プロジェクト



「教室からはじめる展—5つの提案—」(2010年11月23日(火・祝)～12月3日(金))終了後、美術館1階のプロジェクトルームでは、引き続き展示を行っています。「教室からはじめる展」会期中に開催したシンポジウムや座談会の成果を反映させ、今後も更新していきます。

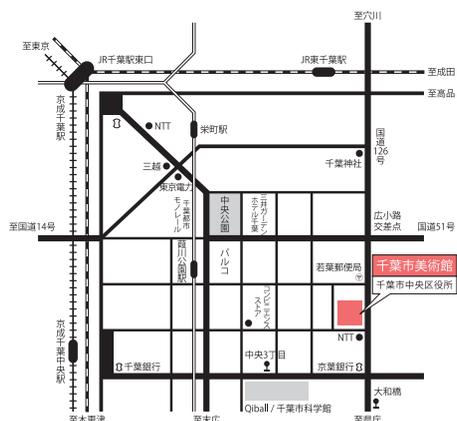
\*開催情報について、美術館までお問い合わせいただくか、WiCAN2010の公式サイト <http://www.wican.org/> でご確認の上、ご来場ください。

## ◎千葉市美術館所蔵作品展「銅版画の森へーゴヤ・ルオー・浜口陽三・深沢幸雄らの作品よりー」

千葉市民ギャラリー・いなげにて千葉市美術館の所蔵作品展を行います。浮世絵や近代版画の所蔵が多い当館のコレクションから、銅版画を中心に約50点が展示されます。入場無料となっておりますので、この機会に是非足をお運びください。

[会期] 2011年2月8日(火)～2月20日(日)  
[会場] 千葉市民ギャラリー・いなげ  
[開館時間] 9:00～17:15  
[休館日] 2月14日(月)

ジョルジュ・ルオー  
〈長き苦悩の古き場末にて〉  
《ミセレーレ》10  
千葉市美術館蔵(布施コレクション)



### [交通案内]

- ◎JR千葉駅東口より
- 徒歩約15分
- 千葉都市モノレール県庁前方面行「霞川公園駅」下車徒歩5分
- バスのりば7番より大学病院行、または南矢作行にて「中央3丁目」下車徒歩3分
- ◎京成千葉中央駅東口より徒歩約10分
- ◎東京方面から車では、京葉道路または東関東自動車道で宮野木ジャンクションから木更津方面へ、貝塚IC下車、国道51号を千葉市街方面へ約3km、広小路交差点近く
- ◎地下に駐車場があります

### [編集・発行]

千葉市美術館  
〒260-8733 千葉市中央区中央3-10-8  
TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316  
Chiba City Museum of Art  
3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-8733, Japan  
[発行日] 2010年12月13日  
[印刷] 半七写真印刷工業株式会社

 千葉市美術館  
Chiba City Museum of Art

<http://www.ccma-net.jp>

